

# RILAC NEWS

No. **26**  
2023 / 5

公益財団法人荒川区自治総合研究所  
(Research Institute for Local government by Arakawa City)

## 住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合 「幸せリーグ」実務者会議

令和4年度幸せリーグは、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、総会を書面決議により行い、加入自治体の首長様からご寄稿いただいた寄稿集(令和3年度作成、令和4年度追加・更新)をもとに、互いの施策について加入自治体間での質疑応答を行い、政策の互換性を高めていく活動を実施しました。

また、実務者会議では、講演会と事例報告会をテレビ会議形式で2回開催しました。第1回目は、令和4年12月2日(金)に、木村俊昭氏(東京農業大学教授・東京大学大学院非常勤講師・日本地域創生学会長・地域創生実践総合研究所長)による「地域創生・SDGsの本質-実学・現場重視の視点から-」というテーマでご講演いただきました(第23回実務者会議)。第2回目は、令和5年2月2日(木)に、幸せリーグ加入自治体である岩手県北上市、島根県隠岐郡海士町から「地方(地域)創生」「人口減少(少子高齢化)」のために取り組んでいることについて事例報告いただきました(第24回実務者会議)。本号では、木村俊昭氏の講演内容を中心にご紹介します。

### ●「幸せリーグ」とは…

住民の幸福を政策の基本に据えた取り組みをされている、あるいはそうした取り組みを検討されている基礎自治体間の、緩やかな連合体です。基礎自治体同士が連携し、意見交換、情報交換等を行うことにより、住民が真に幸福を実感できるような地域社会を目指しています。

幸せリーグ参加自治体一覧 (令和5年5月1日現在)

| 都道府県 | 自治体名 | 都道府県 | 自治体名    | 都道府県 | 自治体名   | 都道府県 | 自治体名 |     |
|------|------|------|---------|------|--------|------|------|-----|
| 北海道  | 釧路市  | 福島県  | 石川町     | 東京都  | 荒川区    | 兵庫県  | 加西市  |     |
|      | 美唄市  |      | 小野町     |      | 奥多摩町   |      | 奈良県  | 高取町 |
|      | 北広島市 | 茨城県  | 龍ヶ崎市    | 神奈川県 | 小田原市   | 和歌山県 | 広陵町  |     |
|      | 和寒町  |      | 取手市     |      | 大和市    |      | みなべ町 |     |
|      | 斜里町  |      | つくば市    |      | 葉山町    |      | 飯南町  |     |
|      | 遠軽町  |      | 潮来市     |      | 松田町    |      | 島根県  | 邑南町 |
|      | 広尾町  | 栃木県  | つくばみらい市 | 新潟県  | 三条市    | 広島県  | 海士町  |     |
|      | 浜中町  |      | 鹿沼市     |      | 津南町    |      | 熊野町  |     |
|      | 標茶町  | 群馬県  | 市貝町     | 富山県  | 高岡市    | 徳島県  | 阿南市  |     |
|      | 弟子屈町 |      | 桐生市     |      | 南砺市    |      | 佐賀県  | 佐賀市 |
|      | 鶴居村  |      | 長野原町    |      | 射水市    |      | 熊本県  | 天草市 |
|      | 白糠町  | 埼玉県  | 秩父市     | 山梨県  | 南アルプス市 | 大分県  | 中津市  |     |
|      | 中泊町  |      | 吉川市     |      | 北杜市    |      |      |     |
| 岩手県  | 釜石市  |      | 皆野町     | 岐阜県  | 大垣市    |      |      |     |
| 宮城県  | 大河原町 |      | 美里町     | 静岡県  | 三島市    |      |      |     |
| 秋田県  | 女川町  | 松戸市  | 愛知県     | 高浜市  | 三重県    | 高浜市  |      |     |
|      | 秋田市  | 館山市  |         | 長久手市 |        | 亀山市  |      |     |
| 山形県  | 藤里町  | 成田市  | 京都府     | 京丹後市 | 滋賀県    | 草津市  |      |     |
|      | 鮭川村  | 我孫子市 |         | 京丹後市 |        | 守山市  |      |     |
| 福島県  | 福島市  | 鴨川市  | 兵庫県     | 三田市  |        |      |      |     |
|      | いわき市 | 酒々井町 |         |      |        |      |      |     |
|      | 二本松市 | 大多喜町 |         |      |        |      |      |     |

## 講演「地域創生・SDGsの本質 —実学・現場重視の視点から—」(要約)

### 講師



木村 俊昭 氏

東京農業大学教授・東京大学大学院非常勤講師・  
日本地域創生学会長・地域創生実践総合研究所長

### ●はじめに

私は北海道のオホーツク地域で生まれ育ちました。サロマ湖のそばの紋別郡遠軽町で高校まで過ごしました。その中で、中学校を卒業するときには、一緒に遊んだ仲間がまちを離れていったという状況の中で、私はせめて高校までは地元でいたいと考え、高校までの間、地元で過ごしました。

高校まで地元で過ごす中で、自分のまちが衰退していくところを実感したときに、なぜ、まちが衰退していくのかと考えました。習うのではなくて問う、「誰かが教えてくれない」、「習いませんでした」ではなく、自分が自らを問うという中で、なぜ、このような現象が起きているのだろうかということを考えました。

そこで、役場、商工会、農協、林業組合等に聞きに行ったところ、これは時代の流れで仕方がないと言うのですが、そうは言ってもやりようがあるのではないかと、せっかく自分たちが住み暮らすまちなので、少しでも何らかの対応が取れるのではないかと考えてい

ました。

そして、地域の衰退原因に関して、2つの考えに至りました。1つ目は、自ら自分のまちの産業・歴史・文化に関し、徹底的に掘り起こしをせず、よく研くこともなく、世界に発信することもしない状況です。うちのまちでは「これがない」、「あれがない」と言って、いわゆる行動に移していないという点が挙げられます。

2つ目は、そのことに取り組むときには、一部の人だけで取り組み、一部の人だけが分かっていたらよいという形で、情報が共有されていないという状況です。あわせて、未来を担う、その地域を本来愛し、地域を何とかしたいと誇りを持ち住み暮らす人たち、いわゆる子どもたちを巻き込んでいないといったところであろうと考えていました。

この2つの考えをもって、高校卒業後、役場に入庁しようと思いましたが、自己分析すると自分は地域のことをまだ知らないことに気づきました。私が、高校1年生当時、北海道には212の市町村がありましたが（現在は179市町村）、私は10か所しか見聞していませんでした。本州は修学旅行に行った程度です。また、海外へ行ったこともありませんでした。この状況で、本当に役場に入庁して役に立つのかと考えました。市役所は市民に役に立つ場所、役場は役に立つ場ですから、自分は市役所や役場では全く役に立たないのではないかと考えました。もっと地域の現場を勉強しなければ、いわゆる問いをしっかりと立て、それを立証する必要があるのではないかと考え、大学に進学することにしました。

▼ スライド 1

**□地域の宝もの探しと研き方**

(1) **産業・歴史・文化**を徹底的に掘り起こし、よく研き、世界へ発信する**キラリ**と光る「**まち育て**」  
 \* **ないものねだりではなく、あるもの探しをしましょう!**

(2) 未来を担う**子どもたち**に**愛着心**を持ってもらう「**ひと育て**」  
 \* **地域の「こと・もの」を地域一体で取り組みましょう!**

(3) 「**五感六育®**」による**全体最適**な「**立体的ストーリー政策**」の創発  
 \* **子ども時から「五感」を育みましょう! 六育バランスが肝要!**



▼ スライド 2

**□地域を変えるチカラとは何か?** ※ひと育て・まち育てとは何か?

(1) **人間関係づくりとコミュニケーション(ひと育て)**  
 ①自己分析、②自己理解から、③他者理解、④相互理解、そして、⑤相互共感へ ※チーム・組織理解  
 \* **四分分割表の活用**

(2) **地域創生の本質(まち育て)**  
 ①実学・現場重視、②全体最適思考、③官民共創(役割分担)  
 ※必然によるキーパーソンと取り巻く人的ネットワークの構築  
 ※「**協働**」「**共創**」「**共育**」「**共感**」

\*「**五感**」: 食べる、観る、香り、体験する、聴く **一覧表の作成**  
 \*「**六育**」: 知育・食育・木育・遊育・健育・職育 **バランス体制**



大空町・メルヘンの丘

まず始めに、小樽市を変える必要があるのかという問いが始まります。誰が変えたいと言っているのか、どう変えたいと言っているのか。通常の場合、地域を変える「チカラ」を探します。地域を変える「チカラ」とは何かと尋ねられたら「自然、人、資源」と答えると思いますが、そもそも地域を変える必要があるのかという視点から入っていきます。何を変えるのか、誰がそう変えたいと言っているのか、またはそれをどう変えなければならないのかを、勝手に考えるのではなくて、対話を繰り返していくことが重要といえます。

それでは、地域を変える「チカラ」とは何かについて説明します(スライド2)。

● **地域の宝もの探しと研き方**

大学4年間は「スライド1」の(1)と(2)、そして(3)に至るところまで学びました。

大学卒業後は、自分の地元に戻ろうと思いましたが、当時の地元役場では、大学卒業者を募集採用しませんでした。本当は自分の住み暮らす地域を何とか元気にしたいと考えましたが、それができず、私はやむなく、いつも遊びに行っていた北海道小樽市へ行くことにしました。小樽市において「スライド1」の(1)から(3)を、実践行動することになりました。

● **地域を変える「チカラ」とは何か?**

そこで、地域を変える「チカラ」とは何かを自分に問いました。それは、例えば小樽市を変える力とは何かということです。

1つ目は「人間関係づくりとコミュニケーション(ひと育て)」です。これは、自己分析・自己理解から他者理解・相互理解へという考えです。いわゆるチームで仕事をするときに、「自分はこれができる」、「自分はこれをやる」、それはもちろんよいのですが、相手は何を思っているのかを考えることが大切です。他者はどういう欲求があるのか、何が望みなのか、何をしたいと感じているのかといったところをしっかりと話し、他者を理解して、それで初めて相互理解になります。ここを学ぶ必要性があるのではないかと考えています。

2つ目は、「地域創生の本質(まち育て)」です。令和4年12月2日の新聞各紙で人口問題に関する記事が掲載されていました。約220万人いた出生数が、今後、80万人を下回るという内容です。これは大変なことだと

言い始めていますが、実際、人口問題についての本質とは何かということを考えずに、大変だといわれています。以前は人口が1億人を超えると大変なことになると言っていたと思います。それが、人口が1億人を下回ると大変なことになると言い始めているわけです。

人口問題の本質とは何かというと、私は、関係人口でも、または人口問題に関する移住政策でもないと思っています。

なぜなら、移住政策は多くの時間、手間、経費を使い、人口を移動させているに過ぎないと思っているからです。もちろん、移住政策も大切な1つですが、「人口問題の本質とは何か」と考えると、最適な人口は何人なのかを考えなければなりません。それを考慮せず、どこかから人口を持ってきて、人口を増やせばよいという発想になるというのは、少し違うのではないかと感じています。その本質を見極めるということが大事だと考えています。

本質を見極めるうえで必要なことは3つあります。1つ目は、実学・現場重視の視点です。いわゆる理論は分かる、言っていることは分かるが、実際にやってどうなのかといったことを検証していく視点です。

2つ目は、全体最適思考の視点です。部分個別の最もよい状況、個別の最適化をつくることは理解できます。ただ、部分個別の最適化をつないでいく必要性は本当はないのでしょうか。まち全体の最もよい状況、つまり、全体最適化をする必要があります。

3つ目は、官民共創（役割分担）です。以前、行政が「何でもやる課」という課をつくったときは本当に驚きました。なぜなら、経費がかかりすぎるからです。「行政がやるべきことは何か」、「民間がやるべきことは何か」を明確にして対処すべきところを、対話をせずに官が全てやりますようなことは考えられません。

そのうえで大切なことは、ストーリー、い

わゆる脚本を作成することです。「誰が」、「いつ何時」、「どのように」登場するかというストーリーをお互いの対話の中でつくり上げていく必要があります。

その点で、私は「五感六育」というのを提唱しています。「五感」というのは、「食べる」、「観る」、「香り」、「体験する」、「聴く」を意味します。

また、「六育」というのは、「知育」、「食育」、「木育」、遊びの中から考える力を身につける「遊育」、健康増進の「健育」、障がいがある方もない方も一緒に働く環境をどうつくるのかという「職育」を意味します。

そして、私は、各地域に入ったときに、「過去にあって、今もある」、「過去にあって、今はない」という一覧表を作成します。いわゆる五感を分析し、または自分のまちの基幹産業、つまり多くの人を雇用し、給料を払い、税金を納めているのはどの産業なのか、どの業種なのかをしっかりと把握します。「何となくうちのまちは農業のまちだよな」、「何となく以前は林業のまちだったよね」ではなくて、どの産業、業種なのか、どこの企業が核となっているのかを調べる必要があります。

そのときにRESAS（地域経済分析システム）を活用します。ただ、数字自体が3～5年前の情報なので、注意が必要です。あくまでも、数字は参考にしながらも、実学・現場重視の視点を持ち、直接現場を回らなければわからないということです。

また、皆さんの住み暮らすまちを五感分析して六育環境のバランスを考えたときに、もう1つ必要なものがあります。五感分析や六育環境は五臓六腑から私が取り入れている考えで、人体に五臓六腑が必要であるように、まちづくりには五感六育が必要であると考えます。ただし、五臓六腑の中には、膀胱が含まれていません。「五感六育+ $\alpha$ 」のことです。

では、五感六育の中で、あなたのまちで、何々

▼ スライド3

## □地域創生・SDGsの実践プロセス

- (1)問題点の発見・課題の整理
- (2)原因(現場状況)分析
- (3)仮説立案
- (4)検証・仮説補正
- (5)政策立案(2つ以上)
- (6)全体調整(根回し)
- (7)政策決定
- (8)実践行動
- (9)検証
- (10)政策修正
- (11)実践行動



### ※着眼点とは？

- ・問題発見力
- ・問題解決力
- ・思考プロセスの可視化
- ・優先順位
- ・リーダーの役割の明確化

### ☆期限は

1年半×2サイクル=3年間



6

育というのがあるとすれば、含まれていない何々育は、あなたのまちでは何ですかといった問いをかけているのです。

## ●地域創生・SDGsの実践プロセス

地域創生・SDGsの実践プロセスについて説明します(スライド3)。

地域創生を考えていくときに、まず始めにすることは、問題点を発見し、課題を整理することです。その中で、現場を見ながら原因をしっかりと分析し、仮説を立てます。

私は、高校1年生、2年生のときに、産業・歴史・文化を徹底的に掘り起こし、研ぎをかけて、世界に発信する、キラリと光るまちづくりという「まち育て」と未来を担う子どもたちに愛着心を持ってもらうという「ひと育て」(p.3「スライド1」参照)、これが重要ではないかという仮説を立てました。

その中で、実際に検証し、政策立案をしていきます。これをやってみよう、あれを実際に実践してみようとするのです。そのときに大事なのが、政策立案をした後、実践行動に移すのではなく、全体調整(根回し)を行います。

いわゆる、「誰が」、「いつ何時」、「どのように」登場するののかの全体調整を行います。行政だけが全てをやるわけではないので、誰に、どのようなときに、どのように関わってもら

うのかをある程度明確に話し合い、対話を通じて全体調整を行っていきます。これが最も重要になってきます。全体調整を行って初めて政策決定となります。そして、実践行動し、検証し、もう一度、政策修正を行いながら、実践行動に入ります。期限は、大体1年半の2サイクルで3年と考えています。なぜなら、先

ほど説明しました五感分析し、基幹産業を分析し、六育バランスを考えましょうという一連の流れがあるからです。

実際の地域活動では、いわゆる地域創生・SDGsの実践又は推進と人財養成プログラムの推進を行っているところです。そこで、令和4年3月4日、日本地域創生学会に地域創生実践総合研究所を立ち上げました(スライド4)。

いわゆる大学に所属している研究所では、その大学内の先生のみで研究が行われています。日本地域創生学会には、いろんな大学の先生に入っていていただき、その強みを有効に生かして、地域創生実践総合研究所を設立しました。現在、15人の実学教員の皆さんでチーム編成をして、地域の課題解決を目指しております。ここで、当研究所の主な推進事業を紹介します。

1つ目は「地域創生士の養成」です。この推進事業は、日本地域創生学会を立ち上げたときからの課題でしたが、令和5年度、地域創生士の第1号が誕生する予定です。

2つ目は「住環境改善」です。現在、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省の4つの省庁が連携して、住環境改善を行っています。WHO(世界保健機関)では室内温度18度を下回る住環境にいる人は寿命が縮まると言われています。イギリスをはじめとす

▼スライド4

**地域創生実践総合研究所（略称：ちいき実践総研）**

（2022年3月4日現在）

**【事業構想の背景】**  
北海道や東北地域など、各自治体や組織等が「地域創生・SDGs・VUCA」の実現に向け、積極的に取り組んでいるも、部分・個別最適化取り組みとなり、地域産業はじめ全体の底上げなど、全体最適化に至っていない状況が多くみられる。また、地域人材リーダー・プロデューサー人材養成・定着が求められているも、育っていない現状にある。

**【目的】**  
北海道や東北地域等の市町村、特に町村の「地域創生・SDGs・VUCA」のストーリー性ある実践や地域人材養成と定着の協力支援体制確立のため、大学・研究機関や企業団体等が連携設立。

**【目標】**  
2021年度から設立準備を開始し、2022年3月4日の開設を目指し、2023年度には先駆的モデルを創発するもの。

**【使命】**  
研究所設立後、まずは、北海道内3地域（道央地域、道南地域、道東地域）を重点的に先駆的モデル化を目指す。その後、順次、他地域へモデル導入し、自走できる地域の実現を推進するもの。

**【参加予定団体等】**  
北海道文教大学を拠点に道内大学や研究機関等と連携する。道内外的地域の創生に情熱ある実学教員、企業団体等と連携し運営するもの。（北海道文教大学、北海道大学、北星学園大学、東京農業大学、東京大学、立教大学、実践女子大学、兵庫大学、宮崎大学ほか）

**【運営方式及び予算】**  
運営は、日本地域創生学会のもと、産官学公民による運営委員会を立ち上げ、随時、協議して推進するもの。予算は、企業団体等から提出（事務所や知見は大学が提供するため、研究所員の活動費（旅費等）のみを想定。随時、協議による）

**【事務局体制・活動拠点】**  
北海道文教大学内に設置し、当初は所長と専門研究員（1名）の体制にてスタートし、順次、事業推進の状況により増員を図るもの。

北海道および東北地域（市町村、特に町村）などの現状と課題

将来（ちいき実践総研の実践的な活動による効果）

**【既存のコンサルティングファーム・シンクタンク等との違い】**  
○机上の書類作成中心ではなく、各地域の「ひと・こと・もの」の希少性、独自性などを活用、「実践」と「実現」を重視するところ。  
以下のプロセスで地域創生の「実践」と「実現」を達成していくもの。  
①実学・現場重視による徹底した現場ヒアリングと対話の場の設定  
②地域の地場産業振興型と未来産業創発型の立体的ストーリー化  
③それに伴う人材養成プログラムの策定と実践（小中大連携等）  
④地域の全体最適化（五感六育）による強固なネットワーク構築  
⑤医療連携事業の推進と地域創生ビジネスとしてのモデル化  
⑥自走できる、できる化、見える化、しくみ化の企画・実践と改善

北海道・東北地域発・国内全体の底上げ

**主な推進事業**

- ◆地域創生士の養成
- ◆住環境改善自治体モデル事業の推進
- ◆医学と農学の連携事業
- ◆人生100年時代における社会人の学び直し(大学院)
- ◆五感六育の全体最適な立体的ストーリー創発

る国々で住環境改善の促進を実施しています。

日本の場合、例えば、北海道の人口の2割が室内温度18度を上回る場所に住んでおり、北海道の人口の8割が室内温度18度を下回る場所に住んでいます。国全体では、全人口の1割が室内温度18度を上回る場所に住んでおり、全人口の9割近くは室内温度18度を下回る場所に住んでいるのが現状です。この現状を見たときに、お金を持っている方、自分で家を改修できる方はよいですが、そうではない方をどうするのかという問題があります。これは寿命が縮まっても仕方がないとは言えません。そうなると、国策としてやるべきではないだろうかと考え、少なくとも負担額の2分の1を支援するとか、住宅全体ではなくて一部の部屋の室内温度が18度を上回る場所にしたら、心・体が休まるのではないかと提案し、できれば骨太方針の中に盛り込んでいただいて推進したいと考えます。これを2、3年のうちに実践したいと思っています。

3つ目は「医学と農学の連携」です。全国を回っている中で、首長等に会ったとき、鬱

状態になっている職員はどれくらい居るのか尋ねると、少ないところでは2%前後、多いところでは20%と伺いました。この状態で本当によいのだろうかと考えたときに、そこを改善する努力が必要だと考えました。その中で、私が最も行きたいのは予防です。

人は、どの状況であれば心が癒される環境にあるのか。誰もが森林浴をすれば心が癒されるわけではありませんし、誰もが農業をすれば癒されるわけではありません。パターンをつくって、週に1回、月に2、3回ということを選んで予防していくということが大事だと思います。

このプログラムを医学系と農学系を含めて連携をして実現したいと考えております。住環境改善を2、3年で終えた後、次の2、3年は、「医学と農学との連携」を実践したいと考えているところです。

これらの活動を地域創生実践総合研究所として実践していくと同時に、チームを編成して、過疎地域、離島や被災地でボランティア支援を実施しているところです。私は3年間で地域を回ると言いましたが、令和5年も既

## ▼ スライド5

## ☆地域創生・SDGsのあるべき姿・実践事例

## (1)茨城県行方市(2015年なめがたファーマーズビレッジ)

焼きいも日本一のまちを小学校跡地に工場を設置。行政、JA、農家、企業の連携で所得増、人口構造に変化、若年層の流入。4方よしを実現。農家所得1.5倍。来場者年間約25万人。

(写真:奈良県御所市提供)

## (2)奈良県御所市(2019年、御所芋焼酎「みかけによらず」)

規格外の大和芋を使用し、芋焼酎を製造。遊休地の活用や農家の所得増、また、直売所の売れ残り野菜等を活用する飲食店等のオープンを目指す。今後は「こしごと(小仕事)」展開の予定。

※農業と水産業のコラボ、医農連携、AIカメラ搭載自販機の活用、つくば市中小高大連携事業、地域循環共生圏(日本発の脱炭素化・SDGs構想)のモデル化、住環境改善、副業・複業の推進、大学発「映画ワークショップ」ほか



10

に依頼を受けており、令和5年から3年間で、人財養成やその地域の基幹産業の再編成をサポートしていこうと考えています。このことについては、私は総務省地域力創造アドバイザーに就任しておりますので、地域創生・SDGs等に関するところは国がその費用を負担することになっています。ご参考までに一部お話ししておきます。

## ●地域創生・SDGsのあるべき姿・実践事例

地域力創造アドバイザーとして、3年間地域に入って実践してきた中で、具体例を2つ紹介します(スライド5)。

1つ目は茨城県行方市です。当時、行方市には小学校跡地をどう活用するかという課題がありました。地域の人から見れば6年間通った小学校ですから、そのまま更地にするのがよい、また、それを別活用すればよいという話にはなりません。地域に何らか役に立つように、できれば残してほしいと考えることでしょう。しかし、それはなかなか難しいという中で、行方市の基幹産業である農業のうち大切な農作物である「さつまいも」に着目しました。実際に行方市に入ったときに思ったのが、さつまいもの生産量の2割から少ないときでも1割は規格外のさつまいもが出る、SDGsの観点からもったいないのでこれをどうするかという話になりました。また、行方

市でさつまいもを仕入れた企業が宮崎工場へ送っていたので、これは小学校跡地に工場を建て、そこで「生産」、「製造・加工」、「販売」いわゆる6次産業化したほうが良いと考え、実施することになりました。

こうして平成27年に誕生したのが「なめがたファーマーズヴィレッジ」です。ポイントとしては、規格外のさつまいもを全量買い上げたことです。その結果、農家の皆さんの所得増加につながり、あわせて、企業も農作物が手に入るようになりました。さらに、JA(農業協同組合)には、さつまいもを熟成するための倉庫を2棟建てていただき、全量買い上げ、熟成し、企業に渡していただきました。

行政には、小学校跡地を有効に活用していただくとともに、工場に勤務する新規採用180人中150人を地元採用する形を取ってもらいました。そのため、20代から30代で、地元出身者または地元に住んでいた人で、この工場に勤めたい、この取り組みに関わりたいたいといった人は応募してくださいと周知しました。その結果150人が入り、それに伴って、人口構造が激変しました。20代、30代の150人が行方市に入っただけと思われるかもしれませんが、それに伴って同世代の人達が、「なぜ行方市に戻ったのか」、「なぜ工場に勤めたのか」というのが気になって見に来るようになりました。そこで同世代が生き生きと楽しくやっていることを感じて、「自分も行方市に戻ろう」となりました。

以上のように、実際に工場に勤める方以外で、農業やその他の仕事に従事している方々の同級生が行方市に戻ってくるという流れが生まれました。

2つ目は、奈良県御所市です。御所市には、

大和芋を作っている農家が300戸ありました。その300戸の農家を保持することを目的に、大手コンサル会社と2年間、今後の展開に関して対策を立てていました。そのような中で、300戸の農家の方が290戸減って、10戸になりました。これは大変なことになったということで、私が呼ばれました。10戸の農家しか残っていないという現状で、これは本当に大変なことだと思いました。担当職員は、このままだとゼロになるという思いだったことでしょう。そこで、私はまずそれぞれの皆さんのところを回りました。

当初、私は農林課に呼ばれました。農林課に伺った際に、農林課の隣に商工課がありました。農林課は農業と林業の情報を持っていて、隣の商工課は商業、工業の情報を持っている。私は、農業と林業の情報、商業と工業の情報が必要なので、農林課と商工課が一緒になって地域を回ってくださいと伝え、私が入った1年目、この取り組みの中心となる企業を含め、まちの小さなお菓子屋さんから加工場を含め、一緒に現場を回りました。

なぜ、このような行動をとったかということ、情報が片側に寄っていると思ったからです。例えば、農作物を商店街で販売する場合、農作物は農林課、商店街は商工課となっています。では、どちらの課に問い合わせるかということ、商工課に問い合わせをしないと分からないという状態でした。情報が片側に偏らないためには、情報共有の必要性がありましたので、次の年からは農林商工課ということになり、一体化していただきました。

次に、問題となっていたのは、10戸の農家の方々が今後も農業を継続する考えがあるのかということです。全員にお聞きすると、皆さんは自分限りで辞めるとのことでした。

そこでストーリーを描きました。大和芋農家の皆さんが「主役」ですから、既存の大和芋農家に合わせて新規就農者も含め、各ワー

キンググループを設立しました。

これは芋の部会、ワケギの部会、それぞれの部会をつくり、各部会が全体会議やワーキングで集まり、パイアを作るとか、どういうことを実践しようかと議論しました。「自分が6次産業化をやる」、「誰かに依頼して農商工連携をする」、とにかくアクションしてください、あなた方が主役ですと伝えました。また、新聞やテレビや雑誌にも登場していただくようにしました。そうすると、自分事になるわけです。その中で、どのように自分たちがやればよいかをだんだん理解していただいたと思います。

課題であったこの大和芋というのは、6対4、少ないときで7対3と、3割が規格外となります。大和芋は丸くなっていれば規格内、ちょっと形が崩れていると全て規格外になります。なぜ、規格外を売らないのかということ、生産者のプライドが許さないということでした。現場を歩くと理由がよく分かります。現場を知らない方は、何で同じ大和芋なのに売らないのですかと言うかもしれません。

この規格外商品をSDGsで考えたときに、例えば、飲物に形を変え、規格外の大和芋を捨てることなく、そしてその農家の方々の所得を上げ、関わる人を増やすといったことをメインに考え、「みかけによらず」という焼酎を作ることにしました。

さらに、もう1つ「こしごと（小仕事）」として、芋の皮をむく等の何らかの小さな仕事を手伝っていただく人の募集をかけました。全体に関われる人が少人数の、いわゆる部分個別ではなく、できるだけ広げる、全体最適にしていくといったところでこの取り組みをしました。

## ●令和5年度に向けて

現在、私は令和5年度に向けて3つのことを考えております（スライド6）。

## ▼ スライド6

**2023年度に向けて、本質を見極め実践行動しましょう！**

- (1)「愛着心」を育む・地元学プログラム  
(小中高教員との対話、小中高大連携事業)**
- (2)社会人を育む・実学プログラム  
(実学教育「協働・共創・共感」、大学院講義の聴講、  
基幹産業の副業・複業人財の養成、海外諸国の  
大学生・大学院生や幹部行政職員等の受入れ)**
- (3)「五感六育」分析によるストーリー化プログラム  
(五感分析・あるもの探しの徹底、六育バランス、  
大学や自治会等による映画ワークショップの実践)**

1つ目は「愛着心を育む・地元学プログラム」です。地元に住み暮らす子どもたちの愛着心を育むプログラムをつくらうと考えております。これは「地元には小学校、中学校しかない」、「高校までしかない」、「大学がないので大学を誘致したい」、そんな悠長なことを言っている場合ではありません。小学校、中学校があれば、高校、大学と連携し、小中高大連携とすればよいと考えます。小学校、中学校、高校があれば、誘致活動よりも、自分たちの志、自分たちがやるべきことにマッチする他地域の大学と連携して、小中高大連携をかけて、自分のまちの最も大切なところ、愛着心を育むプログラムを作成して、それを実践していくことが大事だと思っています。

2つ目は「社会人を育む・実学プログラム」です。大学に入学するには小学校、中学校、高校を卒業してから大学に入学するという流れになっています。ところが大学院の場合は、小学校、中学校から社会人経験をした後に大学院に入学することが可能です。

つまり、社会人になった後、もう一度、実学を学ぶことができます。理論は大事ですが、理論だけではなく、実際に理論がどのように生きるのかといった実学を自分自身が身をもって学んでいく、すなわち、自分で問い、自分のその問いをいかに明らかにするかといったところです。これを学んでいただく

ということが大事かと思っています。

3つ目は『「五感六育」分析によるストーリー化プログラム』です。映画ワークショップを通じて、実際に体感していただこうと考えています。この取り組みは京都府宮津市で行いたいと思っています。宮津市のテーマである自治体と自治会で共に創り上げる「共

創」社会の実現に向けて、協議会を立ち上げて、その中でいかに進めていくかということをも十分練る必要があると考えます(スライド7)。

そこから、「五感」分析し、「六育」環境と「+α」を確認し、自分たちで自分たちのまちをしっかりとつくり上げていくにはどうしたらよいかを学び取っていただきます。同時に、「byカーボンニュートラル」について、学んでいただきつつ、ストーリーの中に取り上げてもらおうと考えています。

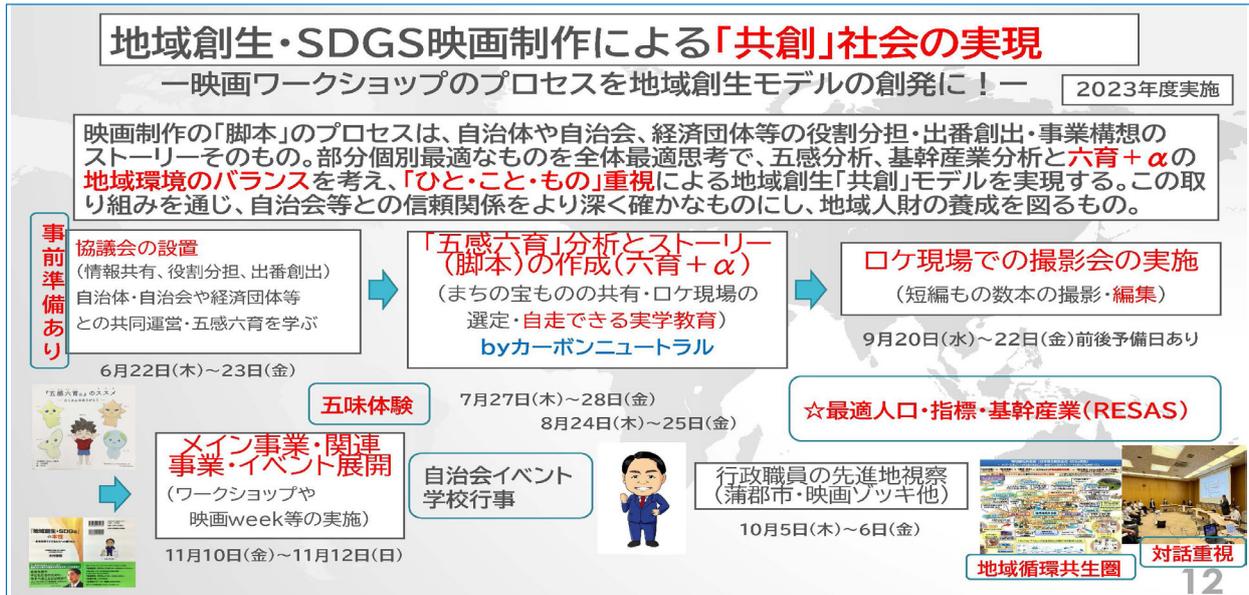
ストーリーをつくり上げた後、自分たちのまちをロケ地として短編物の映画を数本作っていきます。この活動を通じて、プロが作った映画と合わせて、その後ろにこの短編映画をくっつけて、映画祭、いわゆる映画ウィークというのを今、映画関係者の皆さんと企画予定で進めています。

10月には、できれば映画「ゾッキ」のロケ地になった愛知県蒲郡市へ、行政職員の先進視察として宮津市の皆さんと見学をするということを企画したいと考えています。

## ●まとめ

私が、子どもの頃から常々感じているのは、自分は、どの分野の何をどこまで明らかにして、どこから次世代に引き継ぐのかということです。これは父親から言われた言葉です。自らどの分野の何をどこまで明らかにして、

▼ スライド7



それを次世代に引き継いで、どう貢献しようとしているのか。別にすごいことじゃなくても、自分自身がやっている中で少しでも人にお手伝いできることがあるとすれば、それを進化せよと教えられてきました。

行政職員になったときも同じです。自分が住み暮らす、そこで一緒に過ごす人達とともに地域創生分野をどこまで明らかにするのかを考えました。行政職員になって1年生、2年生、3年生のときに、共著出版で本を出したいと思っていました。

なぜなら、ここまでは明らかにできました、ここからはもう少し研究をしますといったところを、1歩ずつ、半歩ずつでも明らかにしていくことが大事だと思っていたからです。そうした中で、50歳からは大学教員として地域創生分野を少しずつでも明らかにしたい、人材養成プログラムを少しずつでも明らかにしたいと思い歩んでいます。皆さんに問いたいのは、あなたはどの分野の、どのことを熱心にやりながら、次世代へ引き継ぎ、進化させるのかです。(スライド8)

「五感六育」の全体最適な「立体的ストーリー」政策の創発というのは、映画ワークショップを含めて実践していこうと考えています。

既存のアイデアとアイデアをつなぎ合わせて新たなアイデアを創る。特に令和5年は統一地方選挙があるので、そこに関わる首長から何かよいアイデアはないのかとか、よい政策はないのかとかと言われることもあるかと思えます。ここで重要なのは「深化」と「探索」です。

つまり、今までやってきたことを深掘りすることと、新しいことを生み出すことです。これら両方をやらなければ、なかなか地域は持続できない。そのためには「強い結びつき」と「弱い結びつき」が必要であると考えています。

「強い結びつき」とは、家族または職場で一緒に働いている仲間との結びつきです。「弱い結びつき」とは、例えば、この幸せリーグで行われている自治体の連携です。あの人は見たことある、名刺交換をしたことがある程度であれば、それは「弱い結びつき」です。この両方が必然でなければならない。「強い結びつき」は当然のこと、努めて「弱い結びつき」を自らつくり上げていくことが重要になってきます。

「弱い結びつき」とは、距離に比例すると考えられています。北海道の中でのネットワーク、

▼ スライド8

## □ まとめ

☆ **地域創生・SDGsの推進、人財養成と定着が肝要！**『**あなたの地域、業種は、どの分野の何をどこまで明らかにし、どこからを次世代へ引き継ぎ、進化させるのですか？**』☆ **「五感六育®」の全体最適な「立体的ストーリー政策」の創発！  
地域創生リーダー・プロデューサー人財の養成！**☆ **既存アイデアとアイデアのつなぎ合わせで新たなアイデアへ！  
\*「深化」と「探索」 \*「強い結びつき」と「弱い結びつき」**※「ひと育て」「まち育て」は**タテ評価**しよう！（ヨコ評価しない）※日々「好き」「たのしい」「おもしろい」の実現  
=誠実さと寛容さ、信頼、真心・怒（じょ）と志！

白くするにはどうするかということを考えてほしいという意味です。

いやだったらもうその仕事はやめて、好きなところで楽しいことをやる、それも人生かもしれないけど、それだとやっぱりここはそうではなかったとって、また変わることになります。いかに自分が今やっている

本州、九州、沖縄の人達とネットワークを張るだけではなくて、海外の方々と「弱い結びつき」、この人とは何度か話をしたことがあるとか、この人とは名刺交換をしたことがあるというところで、必然でネットワークをつくり上げていくことが、新たなアイデアを生み出すきっかけになるということをお伝えしておきます。

また、どうしても人は横評価をすることがあります。隣の誰々ちゃんは100点を取っているのに、なぜあなたは80点なの、とか横評価をする。隣町は新幹線が通っているのに、なぜうちのまちは通っていないのかと横評価をしがちですが、「縦評価」をすることが大切です。

自分のまちはここまで努力して、「このような連携ができたではないか」、「ここまでうまくいっているじゃないか」、ではもう1つ、こういうことをやってみようという縦評価をしていくことが大切です。

そんな中で、今、皆さんが住み暮らすまちをもう1回歩いて回ってみてどうなのかということをしっかり考えてほしいと思います。

日々、「好き、楽しい、面白い」ことを実現することが大切です。あなたの好き、楽しい、面白いは何ですかではなく、今、自分が取り組んでいる仕事を好きになったり、楽しく面

ることを好き、楽しい、面白いに変えられるか、そしてその好き、楽しい、面白いことを周りの人たちと共有できるかということが大事だと感じています。

ロジャー・W・バブソン著書「繁栄の条件」において、一番先に挙げているのが「誠実」です。誠実な人と付き合うということ、向き合うということです。誠実で正直な方と向き合わなければ、自分も同じような形で動いてはいけません。また、寛容さが大事です。

寛容さを表しているのが、「真心・怒と志」です。信頼を得るためには、真心を持ち、いわゆる目配り、気配り、心配りが大切です。自己分析、自己理解で終わることなく、他者理解、相互理解に持っていくための目配り、気配り、心配りが必要です。真心を持ちながら「怒（自分のことのように相手を思いやり、相手にそのことを行動をもって示す）」を持つ。「あなたのこと大切に思っています」、「私はこの地域を大切に思っています」というだけではなくて、その大切に思っているのをどのように実現して、実践していくのかといったところが大事だという問いです。

この「怒」という言葉を大切にしながら、ぜひ皆さんは歩いていただければ、また、仕事に取り組んでいただければよろしいかなと感じています。

15

## 令和4年度荒川コミュニティカレッジで講座を行いました

令和4年12月21日(水)にコミカレ研修室において講座が開催されました。

当日は、研究所から「私たちや地域の幸せを考える」をテーマに研究所の活動内容やGAHの取り組みを説明した後、「荒川区の文化や特色への愛着、誇りを感じる実感(地域への愛着の実感)を高めるためにはどうしたらよいか」というテーマでグループディスカッションを行い、意見共有を行いました。

終了後のアンケートでは、「地域住民の幸せは行政だけではなく、地域住民と共につくっていくものである」や「地域を少しずつ知って地域への愛着を高めたい」などの感想を頂きました。

RILAC

### 私たちや地域の幸せを考える

公益財団法人 荒川区自治総合研究所

※「荒川コミュニティカレッジ」とは、様々な世代が学びを通して仲間づくりを進めながら、地域活動を行うために必要な知識や技術を身につける人材育成の場です。

## 実務者会議の事例報告会について

令和5年2月2日開催の第24回(令和4年度第2回)実務者会議では、2自治体(岩手県北上市、島根県隠岐郡海士町)から地方創生(地域創生)、人口減少(少子高齢化)の取り組みについて、報告いただきました。事例報告会終了後のアンケートでは、加入自治体より

- 地域の資源や魅力については、魅力を活かした事業実施と効果的な情報発信が地域活性化に繋がっていくと思いました。
- 様々な取り組みを拝見することで自分の地域にあった取り組みを考えるヒントになると考えます等の意見が寄せられました。

### 報告テーマ

#### 岩手県北上市

「北上市の地方創生

～工業振興・都市プロモーション～

#### 島根県隠岐郡海士町

「人づくりは自分づくりから

「半官半X」的働き方

～自分が変われば見え方も変わる～

幸せリーグの詳細につきましては、ホームページ(<https://rilac.or.jp/shiawase/>)をご覧ください。幸せリーグへの入会や内容のお問合せについては下記連絡先までご連絡ください。

QRコード



RILAC NEWS No.26 (令和5年5月発行)

編集・発行 公益財団法人荒川区自治総合研究所(RILAC)

住所: 荒川区荒川2-11-1 TEL: 03-3802-4861

FAX: 03-3802-2592

URL: <https://rilac.or.jp/> メール: [info@rilac.or.jp](mailto:info@rilac.or.jp)